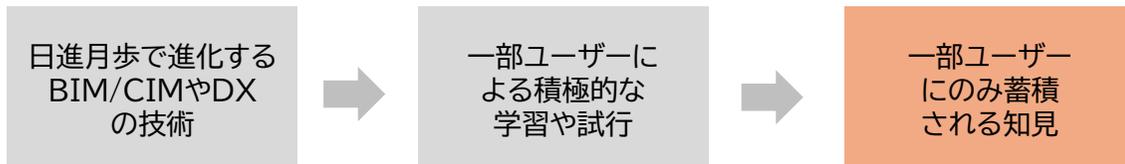
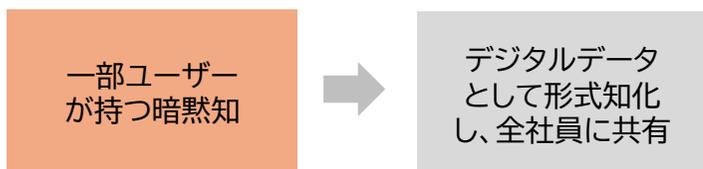


■抱えていた課題



- BIM/CIMやDXの技術進化は速く、それに追従することは容易ではない
- 一部の積極的な社員が学習や試行に取り組むものの、そこで得られた知識は属人化してしまう
- 個人間の知識差は拡大し、BIM/CIMやDXが一部の社員だけの取組になりがちである

■対応方針



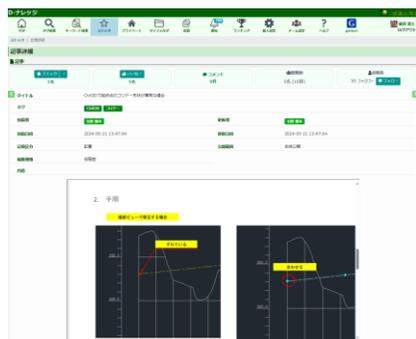
二つの具体的な取組

D-ナレッジ : 自社開発のナレッジマネジメントシステム

D-1 グランプリ: DX関連の知見を共有するイベント

※『D』はDainichiおよびDigitalのD

■解決に向けた二つの取組



●D-ナレッジの開発と運用

各個人が保有する知識を記事にして投稿・蓄積するシステムである『D-ナレッジ』を自社開発した。2021年の運用から約3年が経過している。

「情報共有だけでなく、個人の備忘録としても使える」「他人に同じことを何度も説明する必要がなくなった」などの声が寄せられており、生産性向上に大きく貢献している。



●D-1グランプリの開催

BIM/CIMやDXに関する取組事例を全社に向けて発表するイベントである『D-1グランプリ』を、2019年から開催している。

先進ユーザーによる取組事例の発表は、多くの社員にインパクトを与えており、好評を博している。「自社内でそんな先進的な取組が行われていたのか」と驚きの声が寄せられることも多く、社員のDXマインド向上に貢献するイベントになっている。

■D-ナレッジ



①記事の投稿を促すランキングシステム

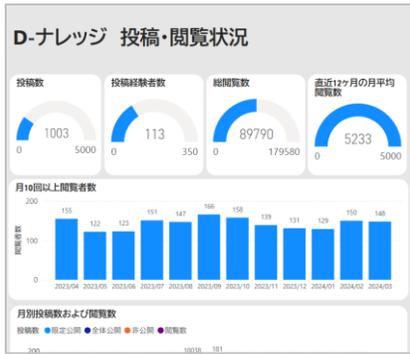
記事を投稿するだけでなく、閲覧数やいいねの数に応じてポイントを付与する機能を実装している。又、年間の最多ポイント取得者を社内表彰する仕組みもあり、投稿を増やすインセンティブになっている。これらの工夫により、運用開始から**約三年で3500件ほどの記事が投稿**された。ストックされた記事を検索する機能やコメント機能も充実しており、社内SNS的な利用もされている。

■D-1グランプリ



①社内のBIM/CIM・DXの事例を共有

BIM/CIMやDXの最新事例を発表する場として『D-1グランプリ』を2019年から開催している。コロナ禍における2020年は中止をしたが、昨年(2023年)には**第4回目となる大会を開催**することができた。全社行事として定着しており、社員のDXマインド向上に大きく貢献するイベントになっている。



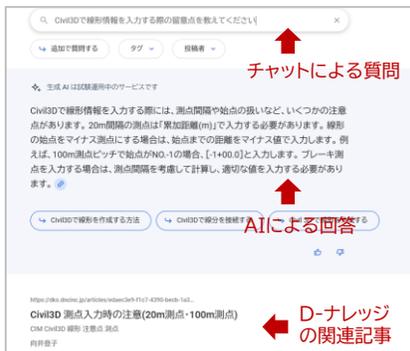
②BIダッシュボードによる分析と改善

記事の投稿状況は、BIダッシュボードによって常に分析・可視化されている。誰が、いつ、どのような記事を読んでいるのかを把握できるため、そのデータを基に人気分野の記事投稿を促すなどの改善を行うことができる。継続的にナレッジの質と量を向上させたことにより、現在では**社員の約半数が月に10回以上アクセスする**、業務遂行に欠かせないツールに成長した。



②スマホアプリによる投票と表彰

各発表に対してはスマホアプリによる投票が行われる。上位者は表彰されるのだが、各部署は自部署から受賞者を出そうと盛り上がりを見せる。**ウェビナーの同時視聴者数は常に全社員の1/3を超えており、参加率は高い。**2023年度は、管理部門の女性事務職員がRPA/BIの取組を発表して、圧倒的な票を得てグランプリを受賞した。



③生成AIによるナレッジの更なる活用

データベース内に蓄積された記事を生成AIに学習させ、チャットによって対話的に情報を取り出せる機能を開発した(現在は試験運用中)。『D-ナレッジ』内の記事が増えるほどにAIは賢くなり、それ伴ってユーザーの利便性も向上する。このサイクルを継続的に回すことで、社員のスキル向上とナレッジの充実が両輪で進むと期待される。



③発表データをナレッジとしてアーカイブ

各発表は動画化され、社内のe-learning用コンテンツとしてアーカイブされる。保存された動画は設計技術者によって再視聴されるだけでなく、営業ツールや技術提案用の資料としても再利用されている。また、新人研修やインターン学生への事例紹介などにも活用されている。